

バンコク日本人学校における授業実践とタイ王国における現地素材の教材化

前泰日協会学校バンコク校（バンコク日本人学校）教諭
長野県白馬村立白馬北小学校教諭 川尻 年輝

キーワード：在外教育施設、バンコク、補習授業校巡回指導、現地理解教育、国際交流

1. はじめに

平成 29 年度から、タイ王国バンコク日本人学校に派遣となり、教育実践の機会を頂いた。また、現地タイ王国から様々なことを学ばせていただいた。現地素材を教材化することで、タイ王国の文化理解につながると感じた。その中からピックアップして紹介したい。

2. 派遣国 [タイ王国] の概要

- ・ 東南アジア中央部 首都 バンコク（タイ語：クルンテープ）
- ・ 51 万 4000 万平方キロメートル
- ・ 熱帯性気候 年間平均気温 29℃（4 月平均気温 35℃）
- ・ 季節 11 月～2 月（乾期）、3 月～5 月（暑期）、6 月～10 月（雨期）
- ・ 人口 約 6000 万人 タイ族約 85%、中華系 10%、山岳民族 5%
- ・ 言語 タイ語
- ・ 通貨 バーツ（1 バーツ＝約 3.5 円）
- ・ 立憲君主制 ワチラロンコーン国王陛下

3. 派遣校の様子

【バンコク日本人学校について】

バンコク日本人学校は、大正 15 年(1926 年)創立の盤谷日本尋常小学校を前身とする、世界の日本人学校の中でも一番歴史のある私立の学校である。正式名称は、泰日協会学校 (THAI JAPANESE ASSOCIATION SCHOOL) と言う。2019 年度は、児童・生徒数 2629 名、84 学級、教職員 230 名という日本国内でも中々見られない小・中併設の超大規模学校で、世界一大きな日本人学校であった。

4. 取り組んだ実践・印象的な体験 等

(1) チェンマイ補習授業校巡回指導

平成 29 年 12 月末にチェンマイ補習授業校へ巡回指導員として訪問し、2 日間の授業実践と現地校の先生方との教育懇談会を行った。小学部と中学部を合わせて 80 名ほどの人数規模であるが、ダブルの子ども（二重国籍児童）の児童生徒の割合が年々高くなっており、日本語に課題を抱える子どもたちへの指導に悩みがあるようだった。実際に授業を行ってみて、日本語の力に課題を持つ児童が多く感じられた。特に低学年では、コミュニケーションそのものがうまくとれず、トラブルになってしまうこともあった。学習の前に子ども達同士の関係性づくりが大切な側面であるよう感じられた。しかし、学校全体としては、教員がとても明るく温かな雰囲気ですべて接しており、児童生徒は学年を越えて楽しく活動している様子が見られた。“チームチェンマイ補習授業校”の姿がそこにはあった。

(2) タイ現地校での授業実践（夏季研修会）

平成29年度から3年間、夏休みを利用して、タイの現地校で、日本文化を伝える授業実践を行った。1年目は、タイ北部チェンライ県、2年目はタイ東北部（イサーン地方）ノンカーイ県、そして3年目は、タイ南部、山田長政の終焉の地であるナコンシータマラート県である。各年度2校ずつ訪問させていただき、合計6校で授業実践を行った。

どの現地校も大変温かく迎え入れていただき有り難かった。参加した教職員の中で3～4人程度のチームをつくり、チームティーチングで日本文化（めんこ作り・鯉のぼり作り・お面作り・紙飛行機づくり等）を伝える授業を行った。日本で言うところの保育園年中5歳児から中学校2年生まで、いろいろな年齢の子どもたちに授業を行った。基本的にタイ語で授業を行った。説明が伝わらないときには、身ぶり手ぶりを使い全身で表現したり、実際にやって見せたりしながら進めた。一生懸命授業をすることで、思いが伝わった様子で、どの年齢の子どもたちも、大変楽しそうに授業を受けていた。

私自身が思っている教育の大切な3点「わかる・楽しい・笑顔」の大切さを改めて感じたり、教えることや教育の奥深さを感じたりした、素晴らしい研修の機会となった。

（3）主体的・対話的な授業研究（道徳科・生活科）

授業研究のテーマとして、3年間「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーナー：能動的学修者）ができる子どもの育成についての研究を深めた。教材提示の仕方や板書技術、話し合いの場の工夫、中心発問の工夫、ロールプレイングなどの授業技術を高めていくことも、学びを深めていくためにはとても大切なことだが、それ以前に教室が安心・安全な場であり、友達同士の関係性や担任との関係性が太ければ太いほど、学級は安定し、仲間とともに学び合い高め合う姿が自然と表れてくることがわかった。言い換えれば、「学びの土台」がしっかりできてこそ、話し合い活動や対話学習が成立すると言っても良いと思われる。

この土台づくりのための具体的手立てとして、「ほめる・認める・価値付ける」の3つが大切である。学級担任は、子どもたちの成長を支援するに当たって、まずは教室の空気感を温かなものにしていくことが大切な点であることがはっきりとした。

さらに、主体的・対話的で深い学びの実現のためには、言葉の力を付けていくことが必須であり、日本語の語彙を増やしていけるような「辞書引き学習」などの学習のほか、ペアトークを核とする各授業時での“話し合い場面の日常化”が大切であることがわかった。

（4）現地校（カセサート大学附属小学校）との交流学習会

バンコクの有名なマーケットの1つに、週末の土・日のみ開かれている“チャトゥチャック ウィークエンドマーケット”がある。その近くに、タイを代表するチュラーロンコーン大学と並ぶ、カセサート大学がある。とても広い敷地内に小・中・高の附属小学校が設置されている。その名門校である小学部とバンコク日本人学校の小学1年生は毎年交流があり、ゲスト校・ホスト校として1年ごとに役割を交代して交流してきた。

赴任した平成29年度は、ゲスト校の年にあたり、カセサート大学附属小学校を訪問し、交流学習会を行った。交流学習会では、開会行事が終わった後に、バンコク校の子どもたちはタイ語で自己紹介をした。バンコク校では、小学校1年生から週1時間のタイ語の学習を通して、タイ語を少しずつ習得しており、タイ語の力試しのような機会となった。照れながらも一生懸命自己紹介をする姿が見られた。その後、タイ国の遊びを通して仲良くなっていく姿が見られた。「ロンドン橋落ちたような、二人組で捕まえるゲーム」、「タイの踊りを一緒に踊ること」「工作用紙を使ったコマづくり」などのアクティビティを行い交流した。特にコマづくりでは、日本のコマと大変似ており、仲良く協力して作っていく姿が見られた。コマが完成してからは、誰が一番長く回せるか競ったり、ケンカこまのように戦ったりしながら、子どもたち同士で大変盛り上がっていた。

遊びを通して仲良くなったところで、お昼の時間となり、弁当と一緒に食べた。朝方とは随分違い、かなり打ち解けていた感じで楽しそうに食べていた。お互いの弁当を見て驚いたり、話したりする様子も見られ、貴重な交流

の時間となった。 昼食後、お互いの校歌の発表と相手国の歌（バンコク日本人学校は、タイ語で「チャー」 という象さんの歌）を歌った。 歌い終わると会場内が大きな拍手で包まれていた。 閉会行事が終わり、帰る頃には とても名残惜しそうにする両校の子どもの姿が見られ、すばらしい交流会になったことが実感できた。タイの文化やタイの子どもたち、タイの教育を知る、実りある交流会の1日となった。

5. 現地理解教育（現地素材の教材化）

（1）高温多湿の環境に適した「高床式の建物」

在タイ日本国大使館の公表によると、首都バンコクにおける年間平均気温は29℃、平均湿度は73%と日本の7、8月頃の気候が1年中続く。タイ王国は、年中蒸し暑く、独特の建物が見られる。それが「高床式の建物」である。バンコクでは近代化が進み、少なくなっているが、タイ国内の河川に面した場所や農村部では見られる。また、寺院の経蔵にも使われている。

高床式の建物の利点として1つ目は、高温で多雨多湿の環境下でも、勾配が急な屋根があり建物の下に大きな空間ができることで、床下から涼しい風を取り入れやすくなり、書物や米等を保管するのに適した環境が作れ、快適に過ごすことができる。2つめは、床下2m程の高さにあることで、浸水被害が出にくいことが挙げられる。さらに3つめは、シロアリやネズミの被害を食い止め、毒蛇などの動物の侵入を防ぐことができる。日本においても、弥生時代の「高床式倉庫」や奈良県「正倉院の宝物庫」に置いても同様な建物があり、大変興味深い建築物であると言える。

国際理解教育では、日本と対象国の似ている点や違う点について考えることを通して、理解を深めていくことがあるが、そういう意味でも、日本とタイにある高床式の建物を比較することで、タイに親しみをもつことができるのではないかと考えられる。

（2）交通渋滞をなくす工夫

バンコク都内は、街のあちらこちらで渋滞が発生しており、ハイブリッド車やアイドリングストップ付きの車も少ないため、時間に比例して排気ガスが生じてしまい、PM2.5などの大気汚染が問題となっている。解消するためには、車を新型のものにするか、交通渋滞を解消し、排気ガスを生じる時間を少なくなるようにするかが大切であると考えられる。

タイでは、渋滞にならぬように道路に色々な工夫がなされているのを見かける。橋脚下を利用したUターン道路である。渋滞が発生しやすい場所においては、右折ができないように道路中央にコンクリートの柵やカラーコーンを置き、その先でUターンし、左折させることで渋滞の緩和を図っているところがある。また、右折時の接触事故を防ぐことにも役立っている。さらに、郊外の幹線道路に行くと、右写真のようなUターン高架橋がある。幹線道路での信号機は、スムーズな流れを遮断するものとなる。しかし、右折をさせたい場所ならば、日本では信号機を設置することになるが、タイではこのUターン高架橋を利用してスムーズに反対車線側に誘導し、左折をさせることで交通の流れを妨げないような道路の工夫がなされていた。日本国内でもぜひ活用したい道路構造だと感じた。

タイの交差点に、「— — —」と表示されている信号機がある。これは警察官が交差点脇にある交番のような詰



ワット トウン シー ムアンの高床式経蔵



幹線道路にあるUターン道路

所に待機し、車の流れを目視したり交差点にあるカメラを見たりしながら手動で変えている信号である。なぜ自動で変わるようにしていないのかについては、交差点の先が渋滞していても、青信号であれば交差点内に進入してしまい、さらに渋滞の原因をつくってしまうことになるので、手動にすることでそうならないよう防止しているからである。また、信号機の特徴として一般的な十字の交差点で説明すると、日本だと対面が青になる仕様だが、タイでは1方向のみ青になる仕様であり、右折・左折・直進と一度に進めるようになっている。いずれにしても、日本では中々見られない道路様式であり、タイ独特の文化を感じることが出来、交通をテーマに国際理解教育を行うのも面白いと考える。

(3) 太平洋戦争（第2次世界大戦）下のタイと日本のつながり

バンコクから北西へおよそ130kmのところを位置し、車で約3時間半のところにある小さな町がある。それが、カンチャナブリである。この町は、第2次世界大戦時に、旧日本軍が軍事物資の輸送などを目的に、タイとビルマ（ミャンマー）の間に建設した泰緬鉄道の話が有名である。泰緬鉄道は、1942年に工事が始まり、翌年には全長415kmに及ぶ長大な路線が開通した。完成まで驚くべき早さである。この町の中心を流れているクウェー川には橋がかかっており、映画「戦場にかける橋」の舞台としても有名である。この川は、泰緬鉄道と沿うように、ミャンマーに源を発し、下流で様々な川と合流して大河となりタイ湾にそそいでいる。

この町に何度もおとずれた。各地に残る戦争の傷跡や博物館などを見て回り、歴史を肌で感じることができた。また、毎年11月末あたりに行われている「クウェー川鉄橋週間」では、当時の様子が劇化され臨場感溢れるシーンを見ながら学ぶことができた。日本の教科書では学べない多くの事実を目にすることができた。

このクウェー川鉄橋のたもとに、高さ4mの大きな大理石の慰霊碑がある。そこには次のような言葉が刻まれている。

「泰緬鉄道建設中に不幸にも病にたおれた南方各国の労務者及び俘虜の為に、此の碑を建て、恭しくその霊を慰む。昭和19年2月 日本鉄道隊」

泰緬鉄道が「死の鉄道」と呼ばれていた当時のことを思うと、胸が痛む。ここでの学びを、歴史教育の中に活かしていきたいと思っている。

6. おわりに

海外日本人学校の仕事は独特なものも多く、特に1年目は見通しが持てず大変苦勞をした。紆余曲折あったが、3年間無事に勤め上げられた。振り返ると沢山の方々の支えがあり、今があることに、感謝の気持ちで一杯である。

家族はじめ、気持ちよく送り出していただいた所属校の先生方、地域の皆さん、長野県国際教育研究会の皆さんなど、地元の方々に感謝である。また、派遣国であるタイ王国、現地の方々には公私に付け、様々な場面でお世話になった。さらに、職場では、全国各地から集まった先生方、学級担任としてお世話になった保護者の皆さん、子どもたちなど多くの方に支えていただいた。出逢った全ての人たちに感謝である。

今後は、学んできたことを活かして、日本の子どもたちの成長につながるように、地域の学びの向上につながるように、さらに国際理解教育の振興に尽力したいと考えている。